

地域交流会開催にむけて

これまで委員会は、地域包括ケア推進のため組織内の連携を強化することを中心に、勉強会や事例検討を行ってきました。しかし、委員会が創設された1年が経過しようとしている中で、地域交流を行いたいという強い思いが、委員の中から徐々にあわわれてきました。

そこで、協議に協議を重ね、委員会主催の第1回地域交流会を開催することにしました。

講師
高崎 買一さん
災害ボランティアコーディネーター
なごや代表

高崎さんから、過去の災害を振り返り、被災に繋がっていく方法について講義して頂きました。全ての内容が参考になりましたが、いくつか、紹介させていただきます。

○阪神淡路大震災では、要救助者の7割以上救助しているのは、自衛隊や消防隊ではなく、被災現場にいる地域住民である。地域住民の協力を促すは行えない！

○東日本大震災で、被害にあった病院は、4階まで浸水し、避難が間に合わなかった患者や職員が亡くなった。生存者は、まだ40分あったが、震災直後は津波が来ると思っていたいかなかった。予想できていなければ対策できなかった。と発言していた。

参加者を募るため、自治会長、民生委員の方の自宅や、協議会に足を運びました。区役所、警察署、いきいき支援センター等の公的機関、地域の医療、福祉に関わる事業所にも声掛けを行いました。

被災地から学ぶ被災の知恵

平成20年の庄内川永徳堤防決壊では、土古野馬場が避難場となり2千人が滞在した記録もある。また、伊勢湾台風規模の台風が来た場合、避難が必要なのは35万人いるが、現状の避難所では22万人しか収容できないとの事。

最後に高崎さんより、被災対策として、○地域のハザード情報を知り、起こり得る被害への対策を怠らない。○普段から近所の人とのつながりを大切に、いざという時に助け合うようとする。○災害を他人事ではなく自分の問題ととらえる。○普段からイメージするという事をまとめて頂きました。

災害は他人事ではなく、港区でも、昭和19年の東南海地震で、道路はうねり、海水と砂が吹き上がった。大人2人分の地割れが起きた。

意見交換

意見交換会では、講師が会場を回り参加者に質問をなげかけていました。

○講師「もし被災したらどうしますか？」

○参加者「逃げます。地震なら建物の外に逃げます。」

○講師「実は危険です。瓦が落ちてきます。その場で身を守るのが基本です。」

という、災害の基本知識に関するやり取りもあれば、

○講師「もし津波がきたらどうしますか？」

○参加者「自分は足が悪いので、避難するにも人に迷惑をかける。だから、その場にいる。」

○講師「救助者は、必ず貴方を助けようとはしません。しかし、説得に時間がかかると救助者まで危険になります。災害の時は皆、生きる努力が必要です。」

という、胸にジーンとくるやり取りもありました。参加型で、防災についてさらに話を深めることができました。

参加者感想

地域住民より

○近所に住んでいます。純正会で地域包括ケアを推進している事があるのは知りませんでした。興味があるので、今後も企画して欲しい。

○町内会に入る人も減ってきているので、助け合いにしても把握できていない。交流できる機会を増やしたい。

区役所職員より

○地域の人の連の想いを聞くことができませんでした。避難場の数が足りないという事、増やせるようにしたい。意見交換で話題となった、災害時に避難をあらかじめ方々にどう向き合うか検討していきます。

警察署職員より

○災害対策は、自助、共助、公助の割合が7対2対1と言われています。しかし近年、近所のつきあいが減っていますので、警察としては巡回をして各家の家族構成を確認していますのでご協力ください。

今後について

初めての交流会でしたが、当初の予想を大きく上回って、63名の方に参加して頂き大変嬉しく思います。

しかし、地域との交流会は1回やれば良いというものではなく、継続して行う事で、より地域包括ケアに繋がる関係を構築していきたいものだと思います。

また、今回は港区で開催しましたが、純正会が拠点に置いている地域は、まだあります。1つの地域だけで行うことなく、全ての地域で行うことができるように、今後活動をしていきたいと思います。

純正会に相談すれば、何か解決できる。そんな風に地域の方が思ってくれるよう委員で頑張っていくことと思います。

